

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	〈いじめ〉と差別の交差／相克：柳美里「潮合い」論
Author(s)	秦, 光平
Citation	近代文学試論, 61 : 73 - 84
Issue Date	2023-12-25
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/54897">10.15027/54897</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/54897">https://doi.org/10.15027/54897</a>
Right	
Relation	



## 〈いじめ〉と差別の交差／相克

——柳美里「潮合い」論——

はじめに

一九八〇年代、日本において〈いじめ<sup>(1)</sup>〉が社会問題化した。それ以来、〈いじめ〉は数多の文学作品に描かれてきた。在日朝鮮人（以下、〈在日〉とする）の作家による創作の中にも、〈いじめ〉への言及はしばしば見られる。たとえば李良枝や鷺沢萌の作品の中には、《でも、私自身は直接差別を受けたりいじめられたりしたことはないんです》<sup>(2)</sup>といった会話や、《政明や和美は国籍を理由によく苛められた、<sup>(3)</sup>》<sup>(3)</sup>と言のだが、雅美にはそういった記憶もあまりない<sup>(3)</sup>》<sup>(3)</sup>といった独白が書き込まれている。

もとより、〈在日〉の問題を考えるうえで差別の問題を避けて通ることはできないが、ここでは、これらの作品で差別と〈いじめ〉とが地続きの問題と捉えられていることに着目したい。先に引用したような語りにおいて、差別の語用と〈いじめ〉の語用とが意識的に使い分けられている様子は見られない。しかし、ある暴力を表現するための言葉として、差別と〈いじめ〉には少なからぬ差異がある。この点について、教育社会学者の伊藤茂樹は次のように考察している。

人が人をいじめるということは日本社会において古くから行われてきたが、かつてそれは、どのような人がどのような人をいじめめるのか、かなりはつきりと想定できるようなことだった（中略）こうした状況から「いじめ」という単独の名詞が生まれたことは何を意味するのか。それは、「いじめ」が特定の役割や地位やパーソナリティとは無関係な、予測不可能な現象になったというのである。役割や地位やパーソナリティを表す言葉と接続しない単なる「いじめ」は、すべての子どもが加害者にも被害者にもなり得る現象として想定されている。またその中身も、どこまでエスカレートするのか予測できず、最悪の場合命を失わせるところまで行ってしまう、おそろしいものと想定され、それゆえに重大な問題なのである。<sup>(4)</sup>

一見、差別と〈いじめ〉は共通の問題に思われる。しかし、〈いじめ〉が伊藤の述べるように《特定の役割や地位やパーソナリティとは無関係》な現象として社会問題化したのだとすると、特定のマイノリティ属性性に対してステイグマが付けられることを問題化する差別とは相容れない側面があることも想定されよう。ここから導き出

秦 光 平

されるのは、〈在日〉の問題が関わる暴力についても、差別の語が用いられた場合と〈いじめ〉の語が用いられた場合とで異なった問題化が為されうるといふ仮説ではないだろうか。差別と〈いじめ〉の関わりについて、具体的な作品に即して思考が深められていくことは重要である。

本稿では、その実践を柳美里の短編小説「潮合い」（一九九六年）を分析評価することにより行なっていく。柳美里もまた、〈在日〉であることを公表するとともに、幼少期に〈いじめ〉を受けたことを告白し、〈いじめ〉問題に関する発言も多く行なっている。一方、エッセイには《だからといって、私と弟が在日韓国人だからいじめられたとは考えていない》<sup>6)</sup>と書き付けるなど、差別と〈いじめ〉の枠組みを意図的に攪乱するような問題意識を〈在日〉への言及に即して提示してきている。川村湊も《ただし、実際にこうしたイジメが本当に彼女の「民族性」に関わるものであるのか、それとも別の要素のものであるのか結論を出すのは難しい》<sup>7)</sup>と論じており、ここまで述べてきたような問題関心からは看過できない作家といえる。

「潮合い」は、後にアンソロジー『いじめの時間』に纏められる作品群が一挙掲載された『小説トリッパー』一九九六年冬季号に発表された点から、従来〈いじめ〉の文脈に即して読まれてきた。<sup>8)</sup>しかし作品末尾にて、作品内の〈いじめ〉の枠組みは一見きわめて唐突にも思われる形で差別の枠組みへと接続される。本稿では、そこで実施されたある種、中途半端な表現を起点に本作を読み直し、〈いじめ〉と差別の交差のみならず、その相克への思索を多く含んだ作品として再評価していきたい。

## 一 〈いじめ〉問題と〈在日〉問題

本作の梗概は以下の通りである。

小学六年生の「麻由美」のクラスに、「里奈」という生徒が転校してくる。当初は、里奈が退屈な日々を刺激をもたらしてくることを期待した麻由美であったが、クラスの注目を集め、これまで自身を贖っていた担任の「田中」が里奈に靡いているようにも感じられ、不快感を募らせるようになる。教室の空気を読み、自分におもねるクラスメイトらとともに麻由美は里奈に詰め寄り、そのやりとりの中で里奈の頭を強打し、傷害を負わせてしまう。

里奈の怪我を受け、担任の田中は校長から「いじめがあったのか、なかったのか」と詰問される。田中は校長の意図を汲み「いじめはなかった」と明言するものの、里奈が《帰化した在日韓国人》であった事実を知ったことも相まって、メディアから追及されることを恐れる。田中は教室に入り「二組にいじめがあったなんて信じない」「いじめではなく事故だった」と涙ながらに語り、甘美な感傷にひたる。そしてクラスメイトたちもまた、「事故だったと思うものは手を挙げて」との田中の求めに応じ、全員が手を挙げるのだった。

以上が本作の梗概である。本作は三人称多元の形式を取り、同級生や教師を含む多数の人物に焦点化して語られていく。教室内の人間関係は当初、複雑なまま進行するが、最終的には、麻由美が里奈に怪我を負わせる出来事により「麻由美…いじめ加害者」／里奈…いじめ被害者」の構図へと収束する。しかし、改めて本文を読んでみ

ると、名詞としての用法〈いじめ〉が出現するのは里奈への傷害を経  
て問題が大きくなった一六三頁以降に限られる。そして、作中の出  
来事が〈いじめ〉に確定したかに思われた作品終盤、里奈が〈帰化し  
た在日韓国人〉であったことがはじめて明かされるのである。その  
様子は、マスコミからの追及を過剰に恐れる担任・田中の姿ととも  
に示される。

それよりも気がかりなのは、田中が快諾したあとに教頭が冗談  
めかして、安田さんのお母さんがですね、前の学校では校長の  
勧めに従って転校に同意したけれど、もし新しい学校でもいい  
めに遭ったらもう泣き寝入りはしません、そんなことがないよ  
うくれぐれもお願ひします、といわれちゃってまいりました、  
いじめで自殺されてテレビに引つ張り出されるのだけはひと  
つ勘弁してくださいよ、わたしからもこの通りです、と頭を下  
げられたことだった。その後、挨拶をしにきた母親は、よろし  
くお願ひいたします、といったきりひと言も口をきこうとしな  
かった。さつき校長から帰化した在日韓国人だと告げられたこ  
とも田中の不安を強く掻き立てた。いじめに差別が加われば、  
たとえ傷害に過ぎなくてもマスコミは放っておかないだろう。

(一六五—一六六頁)

本作にて、明確に〈在日〉の文脈が提示されるのは引用部のみであ  
る。このような構造をもつこの作品について、これまでにはいかな  
る把握がなされてきたのか。

《少なくとも、この小説はいじめや加害者側を一方的に裁断する姿  
勢からはほど遠い所にある》<sup>9)</sup>、《いじめを行う側、いじめられる側の  
心理を正確になぞる》<sup>10)</sup>といった評言は、あくまでも〈いじめ〉の枠組  
みに即して、被害者心理のみならず加害者心理を描き出した点を評  
価したものといえる。また、《潮合い》は、作者のいじめ体験が反映  
された小説である<sup>11)</sup>と、作者自身の語った〈いじめ〉体験との共通性  
を指摘する見解も示されている。この点については作者自身、〈在日〉  
の出自に対し侮蔑の言葉を浴びせられた体験を語っている。

だれにも韓国人だといっていないのに、「ナントオカジン」  
「おまえんちは国勢調査はあるのかってお母さんがいつてた  
ぞ」「カンコク人は自分の国に帰れ！」と砂場の砂をつかんでな  
げられることもあった。<sup>12)</sup>

しかし、このエッセイで語られたような体験と本作に提示されて  
いる事象とでは、明らかに異なっている点がある。それは、本作で  
は、登場人物の誰からも〈在日〉に関する直接的な言及はなされてい  
ない点である。したがって、引用した田中の独白部分でも、作中の事  
象が「本当は〈いじめ〉ではなく差別であったのだと明かされてい  
る」というわけでもないのである。この点をどう考えるべきであろ  
うか。この記述の周辺を読み直すことにより、その内実に迫ってみ  
たい。まずは、先の引用の直前に置かれた、田中と校長による会話を  
読み直してみよう。

「いじめがあったか、なかったか、ここはひとつはっきりさせておこうじゃありませんか、田中先生」校長は柔和な表情を崩さず穏便に対処しようと決めていた。しかし、その顔には頑迷さが顕われている。

「なかった、と思います」

「なかった、そうはつきり報告を受けていたということではないんですね。でもね、田中先生、今回の安田さんの怪我、いじめじゃないといい切れるんですか？ いじめが起きた？」（中略）  
「そうではない、と思います。いや、いじめではありません、そう思います」これ以外の返事はありえない。

（一六三—一六四頁）

この会話が浮かび上げているのは、麻由美から里奈への傷害により決定的となったかに見える〈いじめ〉の存在を学校ぐるみで否認／隠蔽しようとする教師たちの姿である。これまでにも〈いじめはなかったと結論づけようとする教師たちの隠蔽の論理も同時に描かれている〉<sup>13</sup>と言及されてきた通り、実際の社会問題でも早期から問題化されていた「〈いじめ〉を隠蔽する学校」像が提示されていると考えられよう。

ただし、ここに表現されているのが「明らかに〈いじめ〉はあったにも拘らず、そのゆるぎない事実を保身のため隠蔽しようとする学校への批判意識」であると捉えることには慎重になっておきたい。なぜなら、作品の序盤にて「○○であるか、○○ではないか」という二項対立的な思考法そのものを相対化するような語りが、生徒たち

の加害意識に入り込む形で提示されているからである。

そういえば、純一がO・157だという噂はほんとうだろうか。今朝も授業がはじまる前に香織たちと、純一が登校してきたら席を替えてもらいたいと田中というべきか相談したのだが、純一のうしろの席のちなみが、でもO・157じゃないっていわれたらどうする？ といひ出した。結論はわたしが出さなければならぬ、麻由美は唇を舐めながら思案した。絶対にO・157じゃないって証明できるんですか？ というべきだろうか。（一三六頁）

傍線部のような加害意識を通し、純一に「O・157」の感染者であるというレッテルを貼り排除の対象にしようとする様子が示されている。この場面を通して提起されるのは、純一がO・157ではないことを証明する必要性ではありえないはずである。そうではなく、純一と関わるにあたり「O・157であるか、O・157ではないか」という二項対立をあたかも至上命題のように考え、その選択によつて純一への加害行為を正当化しようとすること自体の愚かしさが戯画的に提示されていると見るべきである。つまり本作では、「O・157であるか、O・157ではないか」という二項対立を絶対化することへの批判意識が早くから提示されているのだ。<sup>14</sup>

そして、麻由美の《絶対にO・157じゃないって証明できるんですか？》との質問は、先の引用箇所にて校長から発せられる《今回の安田さんの怪我、いじめじゃないといい切れるんですか？》との

詰問に相似形を為すものとして読める。ならば、教師たちの会話を通して提起されているのは「〈いじめ〉であったのか、〈いじめ〉ではなかったのか」のどちらかに事態を決定しようとする思考法自体への違和を示す批評意識とも考えられよう。そして本作では、その批評意識と同時に、先に見た〈在日〉問題への接続がなされるのである。このような仕組みによりテキスト内部に何が起きており、どのような問題が提起されていると理解すべきであろうか。次節より詳しく検討していきたい。

## 二 〈いじめ〉の構築

本作にて生徒たちは、最終的に「麻由美…〈いじめ加害者〉／里奈…〈いじめ被害者〉」の構図へと収束する。しかし、個々の体験を見てみると、その構図とは別様に展開されたものも多々あった。

たとえば麻由美は、転校生の里奈に当初から強い関心を寄せていたように見える。しかし、里奈に抱く関心の背後には、決して円満とはいえない家族との関わりの記憶が潜在している。次の引用からは、特に兄から受けた暴力が里奈のアイデンティティ形成に大きく影を落としていることが見て取れる。

こんな思いはこれまで何度も味わわれてきた。お兄ちゃんがいとも得をした、どんなにお兄ちゃんにいじめられてもお母さんはわたしを庇ってくれなかった、そう思うと麻由美は悔しさで涙が滲んできた。麻由美は小学校に入った絶対損をし

ないようにしようと心に決めていた。損するのは弱いからだ  
兄に教わったのだ。(一五一頁)

傍線部にて、麻由美から里奈への傷害が起きる以前に「いじめられる」の言葉が登場していることは注目に値する。兄に対する被害意識と、その被害を家族から顧みられなかった孤独感とが、麻由美の裡に「損をするのは弱いからだ」という強迫観念を植え付けることとなったのである。<sup>15)</sup>

また、麻由美から里奈への把握が、「台無しになりそうだった今日一日に良い変化をもたらす兆し」(二三二頁)から「とんでもない厭なもの、自分をむかつかせる厄介事を持ち込んできた」(一三六―一三七)存在へと移り変わるまさにそのとき、教師の田中から受けていた性暴力の記憶が過っていることも見逃せない。

わたしが里奈を気にしているのも、男子たちが妙にそわそわしているのも単に転校生だからではない、目立つからだ！ モデルの仕事をしてたらどうしよう、あれだけきれいだったら可能性がある、だからああやって気どってるんだ。麻由美は、田中が嬉しそうに手を揉んだのは里奈が美人だったからだと思いついてかっとした。ときどき自分にするように何気ない素振りですり奈の胸や尻を撫でるかもしれないと思った途端、臍中の血が全部頭に流れ込んだようで気絶しそうだった。(一三七頁)

ここで麻由美は、田中からの性暴力を被害とは捉えず、専ら「女性

としての魅力」により注目を浴びる契機と捉えている。家庭内での麻由美の立場を鑑みるならば、家庭での孤独感が注目を浴びる欲望に転化し、暴力への認知を歪めている可能性も推測できよう。最終的には里奈への〈いじめ〉加害へと収束する行為の背後で、麻由美はこうした暴力的な文脈を生きていたのである。

そして、麻由美の行為を咎めようとする生徒の姿も描き込まれている。男子生徒の「浩一」は、〈いじめ自殺〉にまつわる認識枠組みを次のように提示している。

「麻由美を怒らしたらあきまへんで、殺されるがな」浩一がいったが、誰も笑わなかった。彼は将来吉本興業に入ってお笑いタレントになるのだと吹聴していて、いつも怪しげな関西弁を使っている。

「自殺するんなら、遺書にわたの名前は書かんといてえな、ほんまやで」(二四二―二四三頁)

傍線部の発言は、単に状況を面白がり、茶化しているだけのようにも見える。しかし作品終盤では、田中の《事故だったと思うもの、手を挙げて》との要求に対し《泣くんじゃねえよ、浩一ははつきりとならない怒りを抑えて上目遣いで様子を窺った。なんだみんな手を挙げるんじゃねえか、少しずつ顔をずらして体育館の裏にいた生徒たちを見た。手がどンドン挙がり、なんだみんなかよ、と思ったとき浩一はすつと手を伸ばした》と、唯一といつてよいほどの良心的な反応が示される(一六七頁)。このことをふまえると、浩一は自身の加

害性を自覚し、暴力的な状況を相対化しようとしていたとも考えられる。しかし、こうした浩一の認識が教室に定着することは全くなく、生徒たちはあくまでもそれぞれの現状認識をそれぞれの形で生きていくのである。

以上の例が示しているのは、麻由美から里奈への傷害が起き教師により〈いじめ〉の枠組みが持ち込まれる以前には、麻由美から里奈への〈いじめ〉に限らない様々な加害性と被害性が教室内に混淆していた事実であり、その状況を〈いじめ〉と捉える視線は一部に存在しても、それが支配的になることはありえなかった状況である。こうした教室の様相が〈いじめ〉の文脈へと画一化することがなぜ可能であったのか。

それは、〈いじめ〉が良くも悪くも当事者性の幅を広げることによって社会問題化したことと関わっている。〈いじめ〉の社会問題化により、それまでは一部の「問題児」に限定される事象と捉えられてきた問題行動群が、学校空間の誰もが無関係ではない暴力として可視化された。この問題化にまつわる事情については、教育社会学者の山本雄二が、森田洋司、清永賢二の両者により早期に提唱された「いじめの四層構造」理論<sup>16)</sup>を参照しつつ、次のように整理している。

1986年に著作として発表された「いじめ集団の四層構造論」は各方面に影響をあたえ、また多くの文献に引用されるなど、いまやいじめ理解の定説となった観がある。その理由の一つはこれがいじめを学校問題として認識する論拠を提供しているからであろう。というのは、この「四層構造論」はいじめのあ

る学級のすべての生徒を言説編成上、取り込んでいるからである。「四層構造論」以降、自分のクラスにいじめの発生を聞いて、それと無縁でいられる生徒は論理の上で1人もいなくなつた。<sup>17</sup>

「いじめの四層構造」理論に象徴されるような〈いじめ〉理解が浸透していくとともに、教室空間に〈いじめ〉と無関係な者は一人として存在しなくなるような論理／倫理が形成されていった。このことにより、それまで「いやがらせ」「子どものけんか」等と称され軽んじられていた暴力への取り組みの重要性が提起された意義は決して過小評価されるべきではないが、一方で、こうした〈いじめ〉理解があくまでも事後的に出来事を解釈することでしか為されづらい問題も指摘されている。

教育社会学者の北澤毅は後年、同じく「いじめの四層構造」理論について〈いじめを「教室の病い」と捉え、生徒たちを「加害者」「被害者」「観衆」「傍観者」という四類型に分類可能であるためには、教室内で行われている相互行為が「いじめである」ことを全員（少なくとも四類型に分類可能な全員）が知っていることを前提としたうえで、教室内の生徒たちのその状況への関わり方が類型化されていると理解できるはずだ<sup>18</sup>と、その理論的限界を指摘している。つまり「いじめの四層構造」は、ある暴力が〈いじめ〉であったという理解が共有された後の時点での分析には効力を発揮する反面、〈いじめ〉であるとの認識が共有されていない時点で存在していた文脈の多くを捨象してしまう危険があるのである。<sup>19</sup>

本作の中で生じているのも、そのような事態であると考えることができよう。麻由美から里奈への傷害が起きる以前には、登場人物のそれぞれが別様な文脈を生きていたことは本節にて見てきた通りである。しかし、〈いじめ〉という認識枠組みを事後的に提供されることにより、その全員が「麻由美…〈いじめ加害者〉／里奈…〈いじめ被害者〉」である出来事の当事者になつたのである。

そして、前節に示したように「〇〇であるか、〇〇ではないか」といった二項対立を絶対化することへの批評意識を本作に見出すならば、本作が最も主眼を置き戯画化しているのもこの点であると考えられよう。本作は、決して単純なものではなかった様々な文脈が〈いじめ〉の物語へと一本化してしまうことへの批判意識を示しているのだ。その意味では、本作への〈いじめ〉を行う側、いじめられる側の心理を正確になぞる<sup>20</sup>といった把握は正確なものではない。本作が可視化しているのは、〈いじめ〉とは別種の文脈で稼働していた種々の暴力性が、外部から認識枠組みが提供されることにより、単一の〈いじめ〉物語へと事後的に編み上げられていく様なのである。

では、こうした物語化により捨象された文脈とはいかなるものだったのか。最後に次節にて、ありえたかもしれない別の文脈に関する考察を行なっていく。

### 三 〈いじめ〉と差別

先にも述べたように、本作に浮上する〈在日〉問題の文脈は、唐突かつ中途半端な印象を与えるものである。その理由を、特に里奈の



側の事情を見ることにより考えていきたい。

里奈についてはこれまで《高度な攻撃誘発性を帯びた子は、むしろ、いじめを誘発する〈問題児〉と見なさざるを得ないというわけなのだろう》<sup>20</sup>、《里奈もまた観念の世界を生きて、とじている。それは、外からの圧力（いじめ）から身を守る術であった》<sup>21</sup>といった分析に見られるように、その被傷性に着目されてきた。こうした分析をふまえ、里奈に焦点化された箇所を読んでみると、総じて、その行動原理が明確には明かされないという特徴が見えてくる。では、この特徴と被傷性の問題とを併せて考えたとき、里奈の背景はいかに推測できるだろうか。

たとえば、転校の理由について麻由美たちに詰め寄られる場面では、次のような自意識が示されている。

「あたしたちのクラスに入りたかったらさ、ちゃんといいなさいよね。どうして転校してきたの、転校してきた理由教えてくれる？」麻由美が腰を屈めて下から睨めつけるようにしていった。里奈はこたえられずわずかに首を傾げた。（中略）

里奈は理由をいうつもりはなかった。（二五八頁）

里奈は麻由美たちからの質問を頑なに拒絶する。また、別の箇所でも《前の学校でいじめに遭って転校してきた》（一六五頁）ことは示されるものの、当の〈いじめ〉の内実や背景は一切、明かされない。同様に、家の場所を教えるよう麻由美たちから詰め寄られた際にも、それを明かそうとはしなかった（一三九―一四〇頁）。

里奈がこのように転校の理由や家の場所を語りたがらない背景に、〈在日〉として里奈の家庭に向けられていた差別があるのでは、と推測することは十分に可能であろう<sup>22</sup>。里奈の被傷性は、個人の資質としてだけでなく、環境要因を考慮に入れて理解すべきものとも考えられるのである。一方、麻由美たちに詰め寄られる場面に示される《里奈は追って来た麻由美の目を見て何をいつても無駄だと思った。こんな目は何度も見た。どの学校に転校しようが、きつとみんな同じ顔をしている。でもどうして自分だけ違う顔をしているのか里奈にはわからない》（二六一頁）といった自意識からは、自分が何らかの理由で排除の対象にされていることは意識していても、〈在日〉の出自については知らされていなかったことも伺える。

一方、麻由美の自意識を見てみると、転校生が来たことを知り、麻由美は《北海道か沖縄から転校してきたならよかったのに。アメリカ人ならもつといい。英語を教えてもらえるし、家に遊びにきてもらえばお母さんだって喜ぶにちがいない。もしアメリカ人と手を繋いで歩けば誰だって驚く。みんな振り返って、ねえ、あの子、アメリカ人とお友だちなよ、英語がしゃべれるんだ、外人と仲良くなるなんてあの子偉いわね、と囁くに決まってる》（一三四頁）と実に無邪気な夢想をしている。これは、観光地や先進国として「華やか」な土地への憧れを示すものと捉えられるが、果たして麻由美は《帰化した存在に在日韓国人》である里奈にも同様の羨望を抱くだろうか。こうした記述からは、作中には顕在化しないものの、〈在日〉の存在に對し麻由美が無自覚の差別意識を有していた可能性が見出せる。

このように、里奈の出自に関する示唆は作中にちりばめられてい

る。しかし、作中で里奈の置かれた環境について思索する者はなく、麻由美が《きつと我儘なんだろう、前の学校で悪いことをして転校させられたんだ》(二三七頁)と推測したり、田中が《安田はやっぱり問題児だったのだ》(二六五頁)と吐露したりと、専ら里奈の個人の資質にのみ被害の原因が回収される状況から先に進むことはない。これは、里奈が自身の出自を知らされていないことと周囲の人間が差別意識を自覚しないことが共犯し、麻由美たちの加害行為の背景が透明化されてしまっている状況とすら考えられよう。

個人の資質として理解される事象の背後に構造的な差別が潜在していた可能性が本作には示唆されている。本作は、麻由美から里奈への〈いじめ〉としての物語の背後に、家庭内暴力、性暴力、〈在日〉差別などさまざまな環境要因を含み込んだ複合差別が、当人たちの意識しないところで、〈いじめ〉の形を取って再演されていた可能性を潜在させているのである。にも拘らず、状況が〈いじめ〉として把握される限りにおいて、その可能性が登場人物の意識に上ることはありえない。ただし、注意しておきたいのは、筆者はここで、作中に生じていた事象が〈いじめ〉ではなく、本当は〈在日〉差別である、に違いないと主張したいのではない。そうではなく、〈いじめ〉の認識枠組みによって事象が二項対立的に理解されることで、ありえたのかもしれない差別への思索自体が阻まれてしまっている点を問題にしたいのだ。作中に生じているのは、差別が「あった」とは言い切れないから、なかったであろう」とも「なかった」とは言い切れないから、あったのであろう」とも判断できない状況である。そして本作が体現しているのは、〈いじめ〉の枠組みによってのみ思考されること

で、この決定不可能性が誰からも意識されなくなってしまうのでありようなのである。

このありようは、作品に多く差し挟まれる、麻由美と里奈の目を通した風景の描写にも体現されている。本作は、麻由美と里奈の双方によって見出される《影が無い》校庭の描写から幕を開ける(一二九、一三一頁)。麻由美はこの《影が無い》校庭の風景から、一匹だけで飛んでいた紋白蝶に石を投げた幼少期の体験を想起する。この行為には、紋白蝶を《花畑に追い返そうと》する麻由美なりの意図があったのだが、母親からは《どうしてそんなことするの》と叱責されてしまい、うまく説明することのできなかった自分に《悔しさで胸がいっぱいになる》(一三〇頁)。翻って現在の麻由美を見ると、里奈に傷害を負わせてしまった際に見た《白いワンピースの胸もとに血が赤く滲んでひろがっていく模様》について、一度は《とかげ……》と連想するもの(一六三頁)、作品末尾では《麻由美は里奈のワンピースの赤い染みがばらの花に見えないことに失望していた。ぶどう……はっぱ……こうもり……きんぎょ……ゆうやけくも……いろいろなかたちに見えるが、これだ、とびつたりくるものは思い浮かばない》(二六九頁)という自意識へと収束している。自分なりの意図を明確に持っていた幼少期とは異なり、何らかの枠組みによって状況を意味づけること自体を諦めるような心情へと変化しているのである。これは、里奈が《今朝の校庭と同じ影の無い風景をいつでもどこで見たのか思い出そうと》(一五七頁)た結果《母親とふたりで旅行をした仙台の駅前》を想起し、《何故あんなに長い時間自分をひとりにしたのか、何故あの旅行に父親がこなかったのか、今でも

わからない。里奈はほんとうに知りたいことは誰に訊いても教えてもらえないとあきらめていた。誰もほんとうのことなど何ひとつ知らないのだ(一六八頁)と吐露していることも重なる。本作では、特定の枠組みによって事態を確定させることへの諦念が、麻由美と里奈の心象風景を通じて表現されているのである。

ここまで見てきたような本作の表現は、先述のように〈いじめ〉が当事者性の幅を広げることにより社会問題化したことの功罪を問うものであるとともに、〈いじめ〉表象の中で差別の問題をいかに扱っていけばよいのか、ということへの普遍的な問題提起とも捉えられよう。〈いじめ〉の社会問題化には、それまで軽んじられてきた暴力を可視化する意義が確かに存在していた。しかし、その問題化により差別の文脈を不可視化してしまう危険性はないのか。本作は、〈いじめ〉にまつわるそのような危険性を問うているのである。

#### おわりに

以上、柳美里「潮合い」を、《帰化した在日韓国人》に関する記述を起点に、潮流と潮流とがぶつかりあう潮合いのように生じている〈いじめ〉と差別の枠組み抗争を示すものとして読解してきた。里奈の身に起きた暴力を〈いじめ〉と捉えることにより一様に「当事者」となった登場人物たちであるが、そのことにより数多の文脈が捨象され、単純な〈いじめ〉理解へと画一化されてしまったことは、本稿にて論じてきた通りである。しかし、何らかの枠組みにより事態を理解しようとするこの困難を感じた結果、登場人物たちは

救われたわけではなく、前節に見たような諦念へと行きついてしまっていた。ここからは、〈いじめ〉の枠組みを採用することにより理解を単純化するのではなく、それぞれの置かれた交差的な文脈を彼らが共有し、複合差別を浮かび上げるような形で当事者意識をもつことはできなかったのか、という疑問も喚起されてくるところである。本作が戯画化した「いじめ」であつたのか、〈いじめ〉ではなかったのか」という二項対立を超え、それらありえたかもしれない可能性の追及のため、〈いじめ〉表象の不可能性もまた注意深く検討されていかなくはならないのである。

#### 注

1 「いじめ」は現代日本において一般語として定着しているが、論中に述べるような構築性を前景化させる意図により、本稿では山括弧を付す表記とした。

2 李良枝「由熙」『群像』第四三卷第一一号、一九八八年一〇月、二四―二五頁。引用文中の傍線、中略、注はすべて筆者による。

3 鷲沢萌「君はこの国を好きか」『君はこの国を好きか』新潮文庫、二〇〇〇年四月、一二四頁。一九九七年初出。

4 『子どもの自殺』の社会学「いじめ自殺」はどう語られてきたのか』(青土社、二〇一四年九月、五九―六一頁)。

5 本作は『小説トリッパー』一九九六年冬季号(一九九六年一二月)に初出のち、柳の短編集『家族シネマ』(講談社、一九九七年二月)講

- 談社文庫、一九九九年九月）およびアンソロジー『いじめの時間』（朝日新聞出版、一九九七年四月→新潮文庫、二〇〇五年三月）に再録された。本文引用は講談社文庫版『家族シネマ』に拠り、引用文の末尾に括弧書きで頁数を示した。
- 6 柳美里『水辺のゆりかご』（角川文庫、一九九九年六月、七五頁）。一九九七年二月初刊。
- 7 川村湊『生まれたらそこがふるさと 在日朝鮮人文学論』（平凡社、一九九九年九月、二八二頁）。
- 8 本作は、初出誌にて組まれた特集「いじめの向こう側」の中の小説特集「学校の時間」に発表された。その際「テーマは学校だったにもかかわらず、（注：寄稿されたのは）いじめを扱った作品以外なかった」（『SPA!』一九九七年五月二八日号、二五頁）ことを編集部の子佐見貴子が明かしている。この点から片岡大右は、同特集に掲載の作品群を「学校の時間」というお題に全員がいじめをめぐる創作で応えてしまったという事実を前にしては、学校生活をめぐりいつからか共有されるようになった（注…いじめ）が子どもの世界のすべてであるかのような）通念に作家たちが十分に抵抗できなかったという、想像力のいわば集合的な敗北の証をそこに認めないでいるのは難しい」（『小山田圭吾の「いじめ」はいかにつくられたか 現代の災い「インフォデミック」を考える』集英社新書、二〇二三年二月、一八〇頁）と批判している。しかし、個別の作品のもつ意義については、詳細な作品読解を抜きにしては判断できないところであろう。本稿は、〈いじめ〉表象を通して〈いじめ〉概念の構築性そのものを問題化する作品として、本作の再評価を試みた。
- 9 中村三春「潮合い」（川村湊・編『現代女性作家読本⑧ 柳美里』鼎書房、二〇〇七年二月、五四頁）。
- 10 榎本正樹「柳美里全著作解題」（『文藝』第四六巻第二号、二〇〇七年五月、七六頁）。
- 11 康潤伊「他者と家族の死角に―柳美里『ゴールドラッシュ』論―」（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊二五号―二、二〇一八年三月、二五頁）。
- 12 注6に同じ、一〇六一―一〇七頁。
- 13 注10に同じ、七六頁。
- 14 康潤伊は、柳美里に向けられてきた「祖国志向」の有無を問い、「日本人でも韓国人でもない」というスタンスを許容しないことによつて―あたかも民族的アイデンティティのあり方に正解があるかのよう―に―二者択一を迫ってきた批評や批判」（注11に同じ、二六頁）に抗する作品として『ゴールドラッシュ』（一九九八年）を捉えているが、本作に見出される二項対立的な思考法への批判意識を同様の問題提起として見ることも可能であろう。
- 15 柳は、〈いじめ〉の加害者について、生野照子、山岡昌之、鈴木眞理との座談会にて「なぜ「いじめ」るほど追い詰められているのか―「家庭」もしくは「学校」の人間関係の中で何らかの心理的な圧迫があつて「いじめ」を起こすのですから、「いじめ」たことを責めたり罰したりする前に、まず本人の話や丁寧聞くことが重要だと思えます」（生野照子『人はなぜいじめめるのか その病理とケアを考える』シービーアール、二〇一三年九月）と述べている。近年の家族社会学では家族を「親密圏」〈ケア圏〉〈生活圏〉の「偶発的な重なり合い」と捉える視点も提示されているが（久保田裕之「家族社会学における家族機能論の再定位―親

- 密圏)・(ケア圏)・(生活圏)の構造」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第三七号、二〇一一年三月)、円満でない家庭環境を背景に(いじめ)の「加害者」となっていく麻由美の姿は、《ケア圏》としての機能を形骸化させた家庭の問題を(いじめ)に即して提起した表現としても読むことができるだろう。
- 16 〈いじめ〉について、「被害者」「加害者」のほか「観衆」「傍観者」を取り込み、構造的に進行するものであると捉えた理論(森田洋司、清永賢二『いじめ——教室の病い』金子書房、一九八六年一月)。
- 17 山本雄二「言説的实践とアーティキュレーション——いじめ言説の編成を例に——」『教育社会学研究』第五九号、一九九六年一〇月、七四—七五頁)。
- 18 北澤毅『いじめ自殺』の社会学 「いじめ問題」を脱構築する』(世界思想社、二〇一五年三月、一九三—一九四頁)。
- 19 この問題は北澤毅、間山広朗・編『囚われのいじめ問題 未完の大津市中学生自殺事件』(岩波書店、二〇二二年九月)にてさらに追及されている。この研究成果を受け継ぐものに、片岡大右による前掲書がある。二〇二一年、ミュージシャンの小山田圭吾が過去の〈いじめ〉への発言を理由に東京オリンピック・パラリンピックの楽曲制作担当を罷免され、社会的なバッシングを受けた。この事件について片岡は、小山田の発言が記事掲載の際、露骨的に編集されていたことを分析したうえで、二〇二一年の「炎上」が、小山田がかつて『いじめ紀行』の取材を引き受けることで、この「いじめ物語」の不名誉な登場人物になることにはからずも同意した」と、日本社会に《そこで実際に語られている事柄よりも「いじめ物語」の定型を尊重してしまうという、劣らず不幸な囚わ

- れがある」とことを背景に起きたものであると論じている(注8に同じ、一六四頁)。また、〈いじめ〉の枠組みにより実際の事情から乖離した現実が構築されていく様を描き出したルポルタージュに福田ますみ『でっちあげ 福岡「殺人教師」事件の真相』(新潮社、二〇〇七年一月)がある。これらの研究も示しているように、〈いじめ〉という言葉のもつ強い拘束力により有益な問題提起から外れた副作用が生じてしまう危険性は、様々な事例をもとにさらに検証されていくべきものといえよう。
- 20 注9に同じ。
- 21 青嶋康文「とじること・ひらくこと」『日本文学』第四八巻第八号、一九九九年八月、三五—三六頁)。
- 22 この点について作者は《私にはだれにも決してあかしてはならない、暗い穴ぼこのようなものがあり、それは用心深く歩を進めなければいっか落ちてしまう「落とし穴」なのだ、と思った。友だちを家にまねいたことはないし、父と母をパパ、ママと決めて決して韓国語でよばなかったのは無意識にその穴ぼこの存在におびえていたせいだ》(注6に同じ、六〇—六一頁)と、家の場所を明かすことへの忌避感を語っている。

付記：本稿は、日本社会文学会二〇二二年度秋季大会(二〇二二年一〇月二九日、於・就実大学)での口頭発表に基づいている。発表に際して多くのご教示を下された方々に感謝を申し上げます。